

死なない蛸^{たこ}

萩原朔太郎^{はぎわら すぐたろう}

或る水族館の水槽で、ひさしい間、飢ゑた蛸が飼はれてゐた。地下の薄暗い岩の影で、青ざめた玻璃天井の光線が、いつも悲しげに漂つてゐた。

①玻璃

ガラス。

だれも人人は、その薄暗い水槽を忘れてゐた。もう久しい以前に、蛸は死んだと思はれてゐた。そして腐つた海水だけが、埃^{ほこり}っぽい日ざしの中で、いつも硝子窓の槽にたまつてゐた。

けれども動物は死ななかつた。蛸は岩影にかくれて居たのだ。そして彼が目^{さま}を覚した時、不幸な、忘れられた槽の中で、幾日も幾日も、おそろしい飢餓を忍ばねばならな

かつた。どこにも餌食^{えさ}がなく、食物が全く尽きてしまつた時、彼は自分の足をもいで食つた。まづその一本を。それから次の一本を。それから、最後に、それがすっかりおしまひになつた時、今度は胴を裏がへして、内臓の一部を食ひはじめた。少しずつ他の一部から一部へと。順順に。

かくして蛸は、彼の身体全体^{からだ}を食ひつくしてしまつた。外皮から、脳髓から、胃袋から。どこもかしこも、すべて残る限なく。完全に。

或る朝、ふと番人がそこに来た時、水槽の中は空っぽになつてゐた。曇つた埃っぽい硝子の中で、藍色の透き通つた潮水と、なやなよした海草とが動いてゐた。そしてこの岩の隅隅にも、もはや生物の姿は見えなかつた。蛸は実際に、すっかり消滅してしまつたのである。

けれども蛸は死ななかつた。彼が消えてしまつた後ですらも、尚ほ且つ永遠にそこ^なに生きてゐた。古ぼけた、空っぽの、忘れられた水族館の槽の中で。永遠に——おそろくは幾世紀の間を通じて——或る物すごい欠乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た。

——『宿命』